

高校演劇実践ノート

—— 創作劇への取り組みを中心に ——

伊藤隆弘
山内弘行

はじめに

「柿照葉」をはじめ読んで読んだ印象は、千代子（劇中では「美代子」）さんがとても美しい人に見えたこと、そしていっそう彼女がいたわしく思えたことでした。

九月の初め、広島大学の野地先生が舟入高校にいらつしやって、「柿照葉」の歌をよまれた当時のくわしいお話をしてくださいます。伊藤先生は、「皆んなもこれを劇にするにはどんな形をとればいいのか考えてみて欲しい。」とおっしゃいましたが、私たちはどうやって現代と当時を結びつければよいのかわからず、結局は何もしませんでした。

九月の中旬、伊藤先生から「虎杖忌」の初稿をいただきました。台本をあけてみると、老教授の回想によって当時を偲ぶという形をとっておられました。最初読んだ時、どこに一番大事なポイントを置かか悩みました。話全体が教授の追想となっているので、「ここの一番」の盛り上がりがないという感じがし、結局何の演出意図も持たぬまま、「読み」「立ちげいこ」となりました。

しかし、中国大会も近くなり、冬の寒さがいっそう増してきた一月頃、劇を見るたびにもう何十回と聞いて覚えていたセリフが、「きれいだなあ。」と感じられだしました。そんなことは県大会まで思ったことはありませんでした。老教授、若き日の先生、美代子、母そして祖母、ほんとうに美しい人たちだと思います。戦争という極限状態の中で美しさとも言えるのか、逝く者の悲しみ、残る者の恨みが、悲惨というよりも美しさになっていると感じます。場面転換の時使われる朗詠も、いっそうその美しさをひきたてて、美代子の霊を慰めるだけでなく、美代子を失った先生、母、祖母そして観客の心も慰めているのだという気がします。演出意図と言えらるかどうかわかりませんが、盛り上がりによって自分たちの感動を観客に伝えるのではなく、こうした淡々とした美しさの中からお客さん自身が、それを感じていただければと思います。

（石本洋子 三年）

これは、昭和五十二年、第九作目の創作劇「虎杖忌」を演出した生徒の文章である。文章中にあるようにこの作品は、野地潤家先生の御著作、歌集「柿照葉」に素材をいただいたもので、連続十年集

大会一位、三度目の中国代表として全国大会出場、全国大会二位の成果をおさめたものである。また、この「虎杖忌」上演を機に、演劇部卒業生たちの手でこれまでの作品をまとめた「舟入高校演劇部創作脚本集」を記念誌として出版してくれた。百五十ページ足らずの小冊子ではあるが、その一ページ毎に、わが演劇部の歩みが鮮かにしるされている。高校三年間の青春を、演劇部というクラブ活動に激しく燃焼させた生徒たちの記念碑として、またこれから続く後輩たちの励みともなってくれるにちがいない。

高校教育において、クラブ活動の占める部分はたしかに大きい。特活の一部にすぎない位置づけではあるが、生徒の校内活動の実態をみると、学習時間に匹敵する重さを示しているといつてよい。われわれのクラブにおいても、クラブが楽しいから学校に来るのだという生徒が何人かいる。このクラブの魅力を、学習活動の中に取り出させることはできないものか、そんなことを考えつつ、指導にあたる毎日である。

新指導要領によれば、高校教育の多様化をめざす中で、「演劇に関する学科」も設けられることを示唆している。生徒の個性を尊重し、その能力をひき出していくひとつの方策としては画期的といえよう。しかし欲を言えば、学科として演劇を志す一部の生徒に限られるよりも、広く高校教育の中に位置づけてほしいものである。演劇のもつ芸術性からいえば、例えば芸術教科への位置づけがなされてもふしぎはないように思う。その文芸性から、国語教材の中での戯曲として現在扱われるようになってはいるが、読解中心の受験対策に圧迫されてか、たいてい素通りしてしまうか、せいぜい読んで

すませる程度が実情のようである。「話す」「聞く」の領域の真の確立のためにも、演劇教材の有効な活用をせひ考えたいものであり、広く生徒がその芸術性を理解し、表現の世界を拡充できる分野になってほしいと願うのである。

この小稿では、そういつた演劇教育のあり方を云々するつもりはない。ただこの十数年、課外活動としての演劇部を見守ってきた立場から、高校演劇へのご理解を得たいと思うのである。

。演劇部との出会い

昭和三十八年四月、生徒総会で演劇部（当時は演劇班）の廃止が討議されていた。生徒会規約によれば、部員が五名を割った時、部は廃止され、生徒会予算を受けることのできる文化部から外されることになるのである。

演劇部は、市内高校再編成がスタートする昭和二十四年以来活動している文化部では伝統あるクラブであった。しかし、進学体制の強化と部そのものの発表の場が少ないこともあって部員の減少が続き、活動に支障をきたす状態になっていたのである。五月上旬に行なわれる文化祭（当時は文化部各クラブの発表会であった）を前にしての廃部討議は、演劇部にとっては酷なことであった。

だが、総会は、「文化祭に演劇はなくてはならないものだし、何とか発表してもらおう」と部員の確保に努力してもらおうことを条件に、もう一年ようすを見たらどうか」という生徒会長の異例の提案が了承され、辛うじて執行猶予となったのである。この部員不足という現象は、今もって文化系クラブが一様に抱えている悩みといえ

るかもしれない。

この年、伊藤が着任し、前任校で演劇部を担当していたこと、数少ない部員のひとりやを授業で教えていたこともあって、早々に演劇部と接触するようになったのである。演劇部にはすでに顧問がいたが、校務に多忙な方であり、生徒としては若い新任教師の方が利用しやすかったかもしれない。

文化祭は、臨時雇いを動員して児童劇のようなものでお茶を濁した。その姿勢を批判したところ、今度はムキになって予餞会では、岡本綺堂の「修善寺物語」を探りあげると言い出したのである。全幕では長いので一時間程度にダイジェストし、エキストラ部員を集めることに奔走した。ほとんど授業で担任している一年生ばかりが集まって来た。前任校で顧問をしていたとは言え、専門的知識はないのですべて生徒たちと話し合い工夫した。脚本読みから演技、大道具製作、衣装、カツラの手配、照明器具の準備、何から何までこちらが先頭に立って動かねばならなかった。

ところが、いざ上演となったら予餞会の時間枠に収まらないことになってしまった。せっかく準備してきたのだからと頼みこんで、特別に予餞会に先立って見せる措置をしようということになった。出来いかんでは責任重大であったが、結果は大好評で、ぜひ新年度の文化祭に再上演し父兄にも見せてほしいという校長命令まで出たのである。この評価は、廃部寸前の部にとって起死回生の慶事ではあった。しかし、校長の意向で一方的に文化祭の出し物を決められるのは反対だと、部員たちの反発も出てしまった。結局は校長が部員たちを説得してケリがついたが、今にして思えば反骨精神も旺盛な

集合体であったような気がする。

「修善寺」が文化祭で再演されるこの年から、正式に演劇部顧問を引き受けることになり、すでに担当していた新聞部顧問と兼ねることになったのである。本校における演劇部顧問の二人制はこの時に始まる。現在では、本校でも他校でも大半が顧問複数制を敷いている。実際、生徒の個性を尊重した日々の活動を支えることと、顧問の負担軽減を多少とも両立させようとするためには必要の措置かと思われる。

「修善寺」以後の活動は、再び低調となり、せっかく集めた部員の間には不協和音が目立つようになった。なにぶん個人的集団であり、放置すれば消滅の危機さえも感じられた。年が明けての予餞会は、人手不足で顧問も舞台上に立つ始末であった。

再び定足数ぎりぎりでの新年度を迎えたところ、新入生が若干入部し、文化祭への取り組みは何か可能となった。しかし、発表があれば退部者も出て、再び低迷する危険性もある。この悪循環を断つためには工夫が必要であった。発表の機会をふやして、年間の活動計画を確立する必要があるのである。そのひとつが対外的発表会への参加であった。この発表会はコンクール形式をとっており、広島地区内の加盟校によって行なわれていた。常連の優秀校の顧問をしている同期生から、加盟を誘われていたこともあって、もうひとりの顧問の先生の承諾を得て参加に踏み切ったのである。

こうして文化祭以後の活動目標が定まり、部員減少への歯止め効果はあらわれた。新しい目標に向かって、全員が集集するようになったのである。採り上げた作品は翻訳物で（シングレ作）海に行く騎

者」)、発表会に参加する以上はよいものを、というわけで、それまではやらなかった作品研究や、キャスト、スタッフの人も念入りに行なった。今までになく大がかりなものになったので、さらにエキストラを借り集め、引退していた三年生も模擬試験までやめて準備に駆けつけてくれたりした。しかし、結果はひどいもので、審査の先生方から手厳しい批評をいただいた。要するに芝居になっていないというのである。翻訳劇の難しさもあったが、劇づくりの基本ができていないことを痛感させられたのである。

発表会初参加は、結果としては失敗作であったものの、部員たちに来年こそという展望と劇づくりへの意欲を与えたことは大きな収穫であった。

新しい目標を持っての演劇部建て直しは、次の昭和四十一年度、有能な新入生部員を迎えて始まった。文化祭と秋のコンクールとの間に、新一年生のみによる新人公演を校内で催すことを決めたのもこの年であった。

作品も、自分たちが充分理解できる生活感のあるものを選ぶようになった。演技のみでなく、装置、照明、効果、メイクなど手引書と首引きで学習するようになった。ドラマツルギーがいかなるものか知らないものの、何かをつかもうという熱気は培われていたように思う。

秋の発表会では、会場校の迷惑をも顧みずリハーサルが深夜に及んだにもかかわらず、本番では効果音がまったく出ないという、またしても失敗作となってしまった。しかし、キャストのほとんどが一年生という新鮮さで、しかも大熱演ぶりから努力賞をいただいた

のである。部員たちの感激は、言うまでもない。現在のように、毎回賞に恵まれている部員たちには、この時の感激は想像できないかも知れない。コンクール形式が、はたして文化クラブの発表会に妥当なものかどうかは別にして、賞を得ることがひとつのはずみになることは確かである。劇づくりへの意欲が出たと言うのか、この年は年間五本の上演を記録している。

翌昭和四十二年度は、さらに活動は順調に展開し、部員も増大した。文化祭は、勉強のためにも少し背伸びして、田中千禾夫の「おふくろ」に挑んだ。

夏休みに合宿訓練を始めたのはこの年からである。

秋のコンクールは、前年度採り上げたのと同じ作者の狂言仕立ての作品を選んだ。新しい形式を導入し、演技力を試すねらいからであった。狂言の手ほどきを受けたり、簡略舞台の工夫も重ねた。すべてが勉強であった。地区大会で優秀賞を受け、加盟三年目で県大会へ出場することができた。全員の努力が、やっと実を結んだのである。ところが、県大会では入賞はしたものの、中央から招いた審査の先生から酷評されたもので、これを扱えば何とかなるという安易さがみられるというのである。しかも演技的には、全国大会出場校よりもすぐれているのでよけいに気になったというのである。作品は何であれ、上手にやればよいのではないかと考えしかなかつた部員たちには、この講評は大いに不満であり、質問をするために審査員の所へ押しかけたのである。その場に居あわせなかつたといえ、顧問としては汗顔の至りであった。

思うに、審査の先生は、作品を安易にとり上げることがをいまいし、自分たちの生活感を大切にし、自分たちで消化できる作品を選ぶことの大切さを説いたのである。今日でも、発表会で、演技さえ上手にやればよいという姿勢ばかりが目立つ劇、他の学校よりは変わったもの、目先きの変わった劇を多く見るにつけ、創造性を重んじる高校演劇の理念から、やはり反省すべきことと、あの時の審査の講評を思い出すのである。

この技術至上主義的な劇づくりの姿勢に突きつけられた厳しい指摘を、部員たちがほんとうの意味で理解するまでには、それからかなりの時間を必要としたのである。

翌昭和四十三年度は、ともかくもわが演劇部が県レベルまでには到達したという喜びと自負でスタートした。

まず、春の文化祭は、在校生と卒業生の合同公演という形で、久保田万太郎の「大つごもり」に取り組んだのである。時間に制約される卒業生との練習には、難しい面もいろいろ出てきたけれど、大がかりな劇づくりを先輩後輩が協力して行なうことは、部員たちの得がたい勉強になったように思われる。

秋のコンクールは、就職志望であった三年生が引き続き活動してくれることになり、前年とはほぼ同じ陣容で臨むことができた。作品は前年の反省に従って、部員たちが充分理解をもって取り組めるものという観点で搜した。

その結果、東京の現場の先生の手になる作品で、朝鮮人差別問題を扱った「海岸線」という本を選ぶことにした。人物はすべて女子であったが、作者の許可を得て主人公の朝鮮の少女を少年にし、強

さを出そうとした。素材が重いだけに、同和教育の視点に立った学習を深め、ナレーションを加えたり、セリフの手直しもした。また、部員たちも朝鮮高校の生徒たちとの話し合いなどを通じ、朝鮮問題や人種差別の問題について意識を高めた。

装置は、大小の箱に布をかぶせて岩礁を表現する簡略舞台を工夫した。終始聞こえなければならぬ潮騒の音もいろいろ工夫したが適当なものがなく、放送局にお願いして効果音をダビングしてもらったりした。

こうした努力の結果、「海岸線」は、地区で最優秀賞、県大会では、前年酷評された審査の先生から、「近年にない高校演劇の秀作」と意外な？讃辞をいただき、最優秀県知事賞を受賞したのである。

続く中国大会（当時は中四国大会）は、二学期末考査と重なって、学校長から辞退したかどうかということばもあった。しかし、部員たちのせひ出場したいという熱意から、大会の最終出場という便宜をいただき、午前中の試験を終えてかけつける、ぶっつけ本番の離れわざをすることになったのである。ところが結果は、最優秀文部大臣奨励賞受賞という劇的なものとなり、部員たちは戸惑い、そして狂喜したのである。しかも中国代表として、翌年八月札幌市での全国大会へ出場せよということであった。考えてみれば、恐ろしいような弾みがついたものである。コンクール参加四年目にして、ついに全国大会への道をひらいたのである。部員たちは、感激に続いて新しい事態の幕明けに緊張した。

年度が改まれば、三年生部員が卒業してしまうのでキャストの組

み替えが必要となる。演技力の低下をどう防ぐか、せつかくできあがったまとまりを崩さずに八月までどう持続させるか、大変な課題を負わされることになったのである。それに加えて長途遠征に伴う予算措置、参加人員の枠決め、装置の運搬方法等々、何から何まで初めてのことで当惑するばかりであった。

しかし、この全国大会出場こそ、わが演劇部にとっては大きな転機であり、前進への新たな一歩となり得たのである。それは、既成脚本に頼る劇づくりから、すべて自分たちで作る創作劇への取り組みに目覚めたことである。

札幌市での第十五回全国大会には、地元をはじめ各地区から十一校が出場した。その十一本の上演作品のうち、八本まで創作劇であったのである。生徒の手によるもの、顧問の手によるもの、巧拙の違いはあるものの、すべて高校生が置かれている現状認識から出発した、高校生たちが取り組まねばならぬ方向を示した作品ばかりであった。

われわれももちろん全力をあげて、勢いばいの舞台をみせる努力をしたことは言うまでもない。しかし、本当に自分たちの問題としてどこまで迫ったかということになれば、やはり借り着の域を越えられないもどかしさを感じずにはいられなかったのである。この時の印象を、当時の部員は、次のように回想している。

私達がそこで見たものは、それまで私達の考えも及ばなかった、高校生が自分達の手で作ったあげた芝居だった。自分達を取りまく実生活に取材され、組み立てられた創作劇であった。その時、最優秀校となったのは、忘れもしない岐阜北高校で、「たった一人の卒業式」

という創作劇である。その劇の中では、私達と同じ高校生が、学校での何でもないと思われるような出来事を通して、生き生きと生活している姿が描かれていた。舞台の上で彼らが悩んだり、苦しんだり、怒ったり、笑ったりする。その彼らの気持ちに、観る者に実に素直に伝わってくるのである。

全国大会での体験は、「芝居は所詮作り事に過ぎない」と考えていた私達にとって、非常にショッキングなものであった。札幌から帰るとすぐに秋のコンクールが待っている。皆一様に創作劇に魅せられた私達は、さっそく自分達もそれに取り組もうということになった。（「創作脚本集」より片山松彦……）

県内でもすでにいくつかの高校で創作劇に取り組んでいたものの、ほとんど単発的であり、何年か続いている学校でも主題に一貫したものはなく、全国レベルまでには至っていない感じであった。

そこでわれわれがまず念頭においたことは、高校生が自分たちのレベルで考えながら取り組めるもの、地域に立脚したもので、できれば一貫して追求していけるもの等の条件を満足させる素材をさがすことであった。卒業生たち、全国を踏んだ在校生たちとの話し合いを重ねてその模索の中から、たどりついたのはやはり原爆問題であった。広島市の市立校であり、大半の生徒は家庭の内外において、少なからず被爆問題とのかかわりがあるはずである。重くて大きな素材だけに、どう取り組んでいくか難かしい問題であったが、ともかくもとり上げてみることにした。

こうして、創作劇第一作「白いキャンバス」が生まれたのである。今にして思えば、いろいろ欠点が目につく作品である。しか

し、自分たちの作品を何としても作り上げようという熱意が、再び県一位の評価を受け、今日までもその座を守り続ける先駆けとなったのである。

昭和五十年には、広島市で全国大会を開催することになり、本校はその事務局を担当するまでになった。同時に二度目の中国代表校となり、念願の創作劇で全国大会に臨んだのである。そして第三位の優秀賞と創作脚本賞を受ける予想以上の評価を得た。独自の創作路線を試行錯誤しつつも歩んできたことが、決して誤っていないかったことの証左として受けとめたのである。

クラブ再建から札幌大会までの揺籃の時代、創作に取り組んで十一年を生み出して今日に至る成長期、すでに百名を越える卒業生部員たちを思う時、一年一年の時の重みをし、かりと感ずるのである。演劇部との出会いは、このひとりひとりの生徒たちとの出会いである。将来の演劇人を育てるつもりはない。演劇活動を通して、生活を、社会を、そして人間を考えさせてきたつもりである。これからもそうありたいと思う。クラブ指導に専門家は必要としない。日々の活動に、どれだけ顧問も切りこんでいけるかという、心のあり方が問題なのだと思うのである。

。劇づくりとクラブづくり

受け身的で、目的もなく学校生活を送る生徒が年々増加している今の高校教育の中で、クラブ活動がその人間形成に果たす役割は大きい。授業のみでは楽しさを見出せず、かといって主体的に何かに取り組みもせず、与えられたものを暗記し、言われるままに情性で

毎日を送る、そうしたロボット化して自分というものを見失った生徒が多いことは否定できない。そういう学校生活の中で、異なった学年の同好の士が力を合わせて一つの目標に向かう中には「効果でも、照明でも、ぐっと唇をかみしめて真剣な顔をしてやりよるのを見たなら、やっぱりクラブは現役時代が一番ですね。今はクラブに行ってもサミシイでサミシイで。もう一生ああいうのは経験でけんじやろうて。もしかしたら演劇はやるかもしれないが、舟入高のクラブでやるのとは違うだろうしね。OGになったらせせとクラブに来るけんね。あーあ、もう一度みんなで芝居をやりたい。」(11月のクラブノートより。三年女子。)とあるように、勉強生活のみではとても得ることのできない貴重な体験が生まれる。先日、三年生の送別会で、ある二年生の男子が、「私がこの学校で先輩と本当に呼べるのは、演劇部の三年生だけなのです。」と言っていたが、心のつながり、ふれあいを得ることのできるクラブ活動のもつ意義は大きい。

私たちがクラブを指導する時、よい劇を作ることはもちろんであるが、劇作りを通して生徒の人間形成の中で少しでもクラブ活動が役立ってくれることを強く願っている。高校生の演劇部の活動は、殆んど指導者も素人であり、生徒の演技も稚拙である。道具も揃っていないし、時間の制限、予算の問題、そして個々の生徒の持つ事情と、他クラブ同様その悩みは多い。その中で三年間の活動を通じて、考え、悩みながら成長してくればと願いながら指導に当たっている。何かと問題を抱え、苦しんでいた生徒が、三年間やり抜き卒業していくのは生徒も嬉しかろうが、私たちもそこにささやかな喜

びを見出している。

今の私たちのクラブ指導をまとめてみることから、今後のあり方を探ってみたいと思う。

一、二人の顧問

一つのクラブを二人で指導する難しさはよく言われるし、他校の先生方から、そういう点をどのように克服しているのかと質問されたりもする。確かに種々の難しい問題はあるが、本校は一人一クラブという原則なので二人共この演劇部の指導に専念できる。演劇というのは、平素は劇の練習と装置等の作製、大会ともなれば、装置の運搬、生徒の指導、会場の下見、リハーサル、そして大会役員との打合せ、更には大会運営の役員を兼ねたりと雑用も多く、二人いることにより本当に救われている。そういう中で仕事の分担も自然と分かれている。伊藤が鼻や全国の高演協の役員を勤めていることもあり、外部と関係する渉外等は一切引き受け、クラブ内の庶務的な仕事は山内があたっている。実際の劇作りでも、創作、劇作り等、主としてキャスト関係は伊藤、装置、照明等スタッフ関係は山内と大体分かかれ、遠征でも、大会役員との交渉は伊藤、生徒の掌握は山内というような分担である。これは、過去の経験等からも自然そうなった面もあるけれども、完全な分業ではなくて、生徒の指導には個々の生徒について折にふれて情報交換し打合わせてかかるし、気付いた点は互いに遠慮なく指摘し合っている。当然考えの食い違いも時にはあり、とことん話し合う事もあるが、二人が同じ国語科で同じ研究室におり、しかも九年という長い付き合いから、意志の疎通ができていられるため、クラブ活動の支障になるようなことが全

くないのは喜ばしいことである。更に劇作りに関しては部長、副部长、演出、舞台監督の生徒を交えて、大体の所をしっかり理解しているという点も大きい。

こうしてみると、伊藤が軟、山内が硬という形で生徒に当たり、それがうまくかみ合っている点でもあるが、二人顧問の最も大切なことは、二人が忌憚なく意見を出し合い、互いの考えている所をよく知ることであろう。そうでなければ、異った指導が生じ、生徒が犠牲になってしまい、クラブ活動はその出発点から崩れてしまう。

二、部員の定着

「みんな変わるとるねえ。何か普通の人とは違う感じ。別にこの人がと言うんじやなくて演劇部の三年生全部がよ。まあそうじやなきや演劇部に入らんじやろうとは思うけどね。あー、でもよかった。みんなが演劇部に入っとって。みんなと同じ劇できてよかった。今、むしろ、あー、よかった、って思うの。すーごーくうれしなあって思う。ホント、今みんなに涙流して、ありがとう、ありがとうって言いたい気分」(クラブノート3月、3年女子)。「K君もI君もいいねえ。あんたら一年でコンクールに出て、大役もらって。」(同)と自ら言うように、演劇をやるとういう生徒は個性のある生徒が多く、劇に出たいという願いも強い。個性を取り上げれば大変ユニークな生徒の集まりであり、一步指導を誤ると全くまとまりのない集団と化してしまうが、皆が協力して一つのものを作ることの大切さを知ると、その個性は大きな力となる。そのため各自の責任の重さを植えつけることに留意している。また、どのクラブ

ブでも同じであろうが、殆んど生徒が三年間で何度かは退部を考
える。演劇部ではその時期は六月の文化祭後と十一月のコンクール
後が多い。一つのもの成し終えた安堵感から、勉強の悩み、家庭
の反対、自分の理想とするクラブと現実の人間関係の複雑に入り交
ったクラブとのギャップ等が芽を出すのであろう。安易な方法かも
しれぬが私たちは後述の如く活動のない時期を作らないようにして
いる。一つが終わると次の目標を立てそれに取り組ませ、毎学期一
回は公演の場を持たせている。又それと共に十分な話し合いを持
つ。生徒同士、時には顧問も加わって、相談にのる。そして活動を
続けるのが無理な生徒が出た時も、できるだけ退部は避け、休部と
いう形で、活動が可能になれば抵抗なく復帰できる形をとるように
している。毎年一人位はこうした復帰組がいるが、ここ数年、毎年
十名前後の入部者がありながら、殆んど退部がないということは嬉
しい限りである。

三、活動の基本姿勢

クラブ活動であることの重視、これが私たちの基本で、一人の芝
居のうまい生徒を中心に活動することは全くない。どの生徒も一度
は文化祭か、コンクールでキャストとして舞台上に立たせると共に、
照明効果等のスタッフの仕事も一度はやる。三年間キャストだけ、
あるいはスタッフばかりという偏った形はとらない。キャストの一
見派手に見える中に役作りの難しさ苦しさのあることを知らせるた
めと、裏方として緑の下の力持ちとして自分を殺して劇作りに努力
すること、協力することの大切さを知らせるためである。殆んど
生徒がキャストを夢見ている中で、キャストの決定は冷酷な仕打ち

となることが多いが、その時大切なことは、各々の仕事の大切さを
理解させる外はなからう。これは言葉では簡単であるが、日頃から
十分そのことを教えていなければ難しいことである。それができて
いれば五十分の劇の間ほんの一回か二回しか照明器具に触れられぬ
生徒、何の演技もいらぬ通行人の生徒に、一言二言の言葉をかけて
やることで生徒は自分の働きがいを見つけてくれ、自分の仕事の持
つ意味も理解してくるのである。

さらに一度決定したキャスト・スタッフは、いくらミスキャスト
と思われ、言われても変更しない。その中で指導する教師も、また指
導される生徒も辛いであろうが、自分のなすべき事を最後までやり
ぬく努力と自己の任を果たした後の満足感を味わわせてやるためそ
して生徒の気持ちを重視するためであり、劇のできばえの為に途中
でキャストを変更したりして生徒を悲しませるような事は絶対にし
ない。この生徒あつてのクラブ活動という姿勢はキャストスタッ
フの決定にも反映されており、コンクール作品を除いては、顧問は相
談に乗る程度で、殆んどを生徒が決める。コンクールは伊藤の創作
ということで作者の意見も考慮し、顧問の指導も入るがそれでも、
生徒の決め方は、年により様々で、話し合いの年、投票の年、演出
する生徒が発表する年と、それぞれの年の特色が出ていて、見てい
てもおもしろい。

生徒に責任を持たせるということから、演出、舞台監督、部長、
副部長を重視している。部長、副部長はクラブのまとめ、部員の掌
握等、演出は劇作りの予定からキャストの指導、登場人物の人物像
から劇の主題の把握等、舞監は装置、効果、照明、衣装等、劇作り

の諸々の準備である。またそれらを助ける形でスタッフの中心にはそれぞれ二年生を置き、一年生をサブとしてつけ、一、二年生の意志の疎通も図っている。

四、活動の実際

脚本が決まると、一週間程度の本読みをかねた作品研究を行なう。「人物像」「主題」を中心に話し合いを深め、キャストが決定すると、十日前後でセリフを覚えさせる。多少不安な状態でも、立ちげいこに早くはいると、「人物」にせよ、「主題」にせよ、案外具体的に理解し、構築できるからである。一方、劇づくりと言えば演技に重点を置きがちであるが、スタッフ関係の仕上がりが重要な要素ともなる。照明、効果の練習に一日の練習をすべて費やしたり、装置づくりにキャストも練習を中止して一斉にとりかかるともあ

る。演出者は、キャスト決定に先立って決めることにしており、劇の取り組み期間中のすべての采配は、演出を中心にする。例えば、演技の指導にしても、顧問やOBの気づきもほとんど演出者に示唆し、伝達の窓口はできるだけ一本化するようにして、部員間の混乱を避けるよう注意している。立ちげいこでは、本読みで想定していた人物像を考えなおす時もあるが、一人の人物になり切ろうという姿勢が生まれる。そのためには立ちげいこに入っても前半は小がえしの形で繰り返し練習させることが多く、後半になると全体の流れに重点を置いて通しげいこが多くなる。そしてその後では必ず、演出が演技、照明、効果等の指摘をする。しかし、お茶の出し方、名刺の受け取り方など、日常生活のエチケットを顧問が教えなければ

ばならなかったりすることがあるが、現代の子部員ではしかたがあるまい。

過去の作品の中に、謡曲（「記憶の森で」）、日本舞踊（「明日に舞う」）、朗詠（「虎杖忌」）、仕舞い（「光と蔭の構図」）と素材や演技の上で、日本の芸能が使用されるが、こういう時は専門的に習わせるのは無理としても、大会までの二、三カ月は各々専門家に習いに出かけさせる。一週間のうち、一、二日とはいえ、メンバーが欠けるのは痛い、結果的にはそれなりの効果が出て仕上がりは美しくなる。

五、年間活動計画

一年間の活動は次の様なものであるが、毎日の活動は、平素は五時頃まで、公演の一カ月前位から六時までである。

4月 新入生入部（毎年十名前後）

年により新入生歓迎公演

発声等の基礎練習

5月上旬 読み合わせ、脚本、キャスト決定

下旬 立ちげいこ（小がえし中心）、効果照明、装置作製

6月上旬 通しげいこ

中旬 文化祭（多くの部員に出演させるため、ダブルキャスト

の年も、二つの作品を行う年もある。

7月中旬 コンクールの創作劇が話題になり始める。新人公演脚本

決定と基礎練習

8月中旬 合宿（二泊三日）

下旬 創作準備(資料集め等)

新人公演の練習、準備

9月上旬 新人公演

創作準備(生徒の話し合い、生徒創作)

中旬 初稿完成(読み合わせと併行して脚本検討、セリフ検討、装置プラン作製)

10月上旬 第二稿完成(立ち上げこに入り、照明、効果の準備、装置作製開始)

中旬 中間考查、修学旅行で練習中断

下旬 通しげこ

11月上旬 地区大会(広島地区では毎年20数校が参加、うち4校が

県大会へ)

中旬 県大会(広島県5地区から11校が参加、うち2校が中間

大会へ)

下旬 中国大会5県から8校が参加、うち1校が翌年8月の全

国大会へ)

12月・1月の二カ月はランニングが増え、基礎練習が中心

2月上旬 公演準備と基礎練習

3月 自主公演(4月に行う年もある。)

(なお、講堂の使用は公演の立ち上げこに入っても一週のうち半分程度で、吹奏楽部と共用)

六、合宿訓練

毎年夏休みの八月中旬に二泊三日の合宿訓練を行っている。目的はクラブの和を図るためと、日頃集中的に行えない基本訓練を行う

こと、そしてコンクール向けの創作の準備である。以前は校内で実施していたが、多人数の食事の準備でのトラブル、時間的にルーズになるなどの点から、ここ数年は江田島青年の家で実施している。他の団体等との関係でこちらの思う通りにはいかないが、施設、食事等、恵まれた中で練習に集中できるのは有難い。二泊三日の中で八十分単位の研修が十回組まれているが、その内容は大体次の様なものである。

	第一日	第二日	第三日
6:30		起床	起床
9:10		朝食	朝食
10:30		創作について	創作について
10:40			照明・効果
12:00	入所	基礎訓練	
13:30	昼食	昼食	昼食
14:50	クラブのあり方	基礎訓練	
15:00			
16:20	基礎訓練	レクレーション	
19:30	自夕食	自夕食	
21:00	基礎訓練	基礎訓練	
22:30	自就寝	自就寝	

参加はOBが約十名、三年生が五名前後いるので、約二十名の一、二年生を対象にマンツーマンに近い形で発声等の基本訓練をする。基礎的知識の指導等は、中心となるOB二、三名が、その内容、指導法を話し合った上で、他のOB、三年と共に展開してくれる。生徒も先輩の指導という事で、楽しくそして積極的に取り組んでくれる。秋のコンクールに備えてどうするかを決めるのもこの合宿にお

いてであり、創作をするのかどうか、どんな素材を取り扱うのかに始まり、創作が決定すると準備係りの決定まで大体この時になされる。また平素は十分に行えない舞台や照明に関する指導も、照明をやっていたOBが器具の名称等、基本的事項をはじめとして、前年度の照明プランをもとに指導する。これは実際に生徒がその劇を知っているため、分かりやすいようである。

さらに基本訓練も兼ねて9月早々の新人公演（キャストは一年生のみ）の脚本を使いながら、その練習は展開、発展されていく。

基礎練習用テキストや、合宿の予定プリント、新聞の切り抜き等を中心に活用して効果を上げているが、忘れてならないのは、この全員が起居を共にする中で互いの気心が知れることと、劇とはどんなものか、クラブの楽しさ、苦しさ、そして考えられないような失敗談のクラブ裏面史を知ること、その年のクラブの雰囲気を作り上げられることである。このため、実技面の指導をOB連に任せると、一方、私たち顧問は生徒の人となりを知ることと努める。

七、コンクールでの遠征

コンクールで上位進出する時、遠征では大会に参加するという緊張感と、家庭や学校から離れるという解放感の両方があるが、その遠征をスムーズにするため、次の様な資料を常に準備する。列車の時刻を始めとして細かい大会日程まで入った予定表。大道具、小道具、メイク用品、効果、照明、衣装等の品名、携帯の責任者まで舞監が決めた携行品一覧。照明プラン。装置プラン。会場図。注意事項。これら細かすぎる程の準備は、演劇というものの性格上、小さ

な忘れ物でも上演に支障をきたすということもあるが、このプリントをもとに生徒が自主的に動けるようにするためである。

遠征の間、最も神経をつかうのが健康管理で、寝不足などあればきめんに発声が悪くなり、そうして一人調子を崩すと全体のバランスも崩れてしまう。その点の指導は日頃から徹底しているせいか、最近では就寝も早くなり、早朝の散歩やランニング、発声と、生徒自身が自分で気分を引きしめるようになっていく。

上演前夜は最後の打合せをする。会場でのリハーサルを終えた後、反省を兼ねて上演に備えての細かい打合せなど、約二時間はある。キャストが一度通すのを見ながら、スタッフは各々の場面での任務の確認をする。実際のステージや器具を考えて和やかな中にも張りつめた気持ちでのミーティングである。学校での練習と勝手が違い突然の変更も多々ある。

上演当日は劇の前の十分な発声とメイクをしながらの最後の通しげいこが生徒の気分を紛らしてくれる。

大会参加で常に私たちが生徒に言うことは、劇としてのできを競うことよりも、高校生の演劇大会は自分たちのやってきたものを見てもいい、又知って考えて貰うためののだということである。ただ出場校として劇を演じただけで帰るのではなく、会場の片付け清掃など少しでも手伝えることは自分たちで行い、運営する役員の先生、生徒に迷惑をかけるなど常に言っている。当然宿舎でも食事の片付け、部屋の清掃等うるさいほど言っていたが、近頃はそうした姿勢が上級生から引き継がれ、自主的にやってくれるのは助かるし、他校の演劇の中から少しでも吸収しようと、昼食を除いては会場

から離れたがらないのも嬉しく喜ばしいことである。

八、OB会の協力

過去十数年で約百名のOBがいるが、このOB諸氏の協力は演技指導、装置製作の手伝い、資金カンパ、そして精神的に励ましと大変なものがある。前述したように、過去の創作を集めて脚本集も発刊してくれている。それぞれ余暇のある時は、やって来てはそれぞれが気づきをのべてくれ、又練習終了後もマンツーマンで一時間も二時間も指導してくれる。

大会での遠征ともなると、生徒の負担を考へての資金援助はもちろん、トラックの運転をして装置を運搬してくれたり、毎回数名は同行して生徒の気づかぬ清掃や片づけ、そして見知らぬ土地で、結髪のための美容院を捜したり、連れていってくれたり、特に女子の多いクラブのため、男の顧問では目の届かぬ健康管理など、その果たしてくる役割は非常に大きい。初参加で上がっている生徒には、自分たちの経験談を話して気分をやわらげたり、逆に雰囲気盛り上げてくれたりと、物心両面にわたって援助してくれる。

合宿の手伝い、劇作りの段階でのアドバイス、大会の援助とOB諸氏の様子を見た生徒が、卒業後、同様にクラブの為、生徒の為にまた働いてくれるのである。

今年OB会が劇団を結成して公演を始めるが、我が校のOBのよい点は、側面的援助はするが、活動に直接タッチしないという所が徹底しており、又OBもその点をわかまえてくれているという所である。

以上が私たちのクラブ作り、劇作りの状況であるが、生徒には、自分たちが中心になった時に、自分たちが理想とするクラブ、やりたい劇をやるように常に指導している。一年生としての指導される立場、二、三年生になつての自分たちが中心となつて指導する立場、この全てを経験する中で、一人一人が成長していく姿を見つめられることが、顧問冥利につきるであろうか。

。創作劇と平和教育

現在、各地で平和教育が行なわれつつある。かつての大戦当事国であり、唯一の被爆国であるわが国は、戦争の悲惨さをあらゆる面で体験してきた。今こそわれわれは、核兵器を廃絶し、若者をふたたび戦場へ送ることのないようにしなければならない。戦争を知らない世代が大半を占め、国際情勢も激動している今こそ、平和教育の必要性を認識しなければならない。

本校では、ロングホームルームを利用して各学年目標を定めて平和教育を実施している。第一学年は、「原爆の悲惨さに対する認識」、第二学年は、「原爆と戦争、平和に関する現状の認識」、第三学年は、「世界平和とわれわれの課題」という目標に従つて、それぞれの学年会の話し合いに従つて展開していく。教材としては、映画、VTR、講演、資料館の見学、新聞記事のスクラップ、父母たちの戦争、被爆体験の聞き書きなど、多様な形で利用している。時間的には充分とは言えないものの、無関心生徒の多い現在、啓蒙の意義は大きいように思える。

この本校における平和教育の出發は、実はわれわれ演劇部の創作

活動に始まるのである。他校ですでに実施されている平和教育を、本校ではどう位置づけるか、どのように実施するか、同和教育を中心に議論される中で、すでに原爆問題に取り組んでいる演劇部の活動が注目され、これをまず全生徒に見せることから始めてはどうかということになったのである。こうして、第四作「発掘」が全生徒の前で上演されることで、本校平和教育のスタートになったのは、創作活動の目的に合致した意義深いできごとと言えよう。

あらずし、取り組みの視点、問題点など、いくつかの項目をあけてプリントし、事前に生徒に配布し、鑑賞後、それらを柱にルームで話し合いを持つという展開ですすめられた。被爆二世の意識、結婚差別の問題など、劇の内容に従って、いろいろ感想や意見が出されて、投げ入れ教材的ではあったものの、取り組みとしては成功であった。以後、創作劇を定期的に全校鑑賞するという形にはならなかったが、次年度からは前述の目標に従って、平和教育ロングホームルームは実践されていたのである。

一方、このできごととは、部員たちの劇づくりに対する意識の高揚へも結びつくことができたのである。何のために創作に取り組むのか、ともすれば創作技術のみに偏していく危険性を、平和教育の教材に取り上げられたことで、いかげんな創作姿勢ではいけないという思いに変えられたことの意義は大きいのである。

合宿におけるディスカッション、資料読み、取材活動と幅広く動くようになったのはそのあらわれである。平和問題を考えるラジオやテレビの番組に出演を依頼される機会も次々出来たが、うまく話してくればよいがという顧問の懸念も不必要であった。自分たち

のささやかな実践の中からつかんだことを、それなりにはっきり述べることができるようになった。

「コンクールの期間は、みんな真剣に考えるが、年間通じて継続できていない」という反省もしているが、結果的には、それはそれでよいと思う。被爆体験の継承が年々困難になりつつある今、「ヒロシマの空洞化」を心配する声をよく耳にする。戦後世代が人口の半数を越えた現在、たしかにその懸念は正しい。この状況下での平和教育がいかに難かしいか、またいかに重要であるか、認識を新たにしなければなるまい。年間二、三時間程度しか確保できない平和教育のロングホームルームでも、数か月間の創作劇への取り組みでも、生徒たちの安穩無事な生活に一石を投ずる意義は大きいと思うのである。

加えて、日々の学習生活において、同和教育の視点に立った、人間の尊厳、生きる権利の大切さを考えさせていくことが、人権を守り、戦争を許さない人間を育てていくことになるものと思う。

例えば、本校の国語科では、夏休みの課題作文に、原爆や戦争に関する読書感想文を求めている。「黒い雨」「夏の花」「屍の街」「ヒロシマノート」「春の城」等々、そのとらえ方に差はあっても、建前論になろうとも、それぞれに自分の世界でとらえようとしている。ささやかな歩みかもしれないが、平和教育の効果はあらわれつつあるように思う。

部員たちの場合も、こうした学習活動で深めてくれたものが、劇づくりへ向けても良い反映を示してくれているように思う。夏休みの合宿で行なう創作のミーティングでも、最後は原爆、平和の問題

へ向かって話し合いが煮つめられていくのも、部員それぞれの意識の高まりと考えられないであろうか。

われわれの創作劇が、本校の平和教育を動かす原因になったことは前述の通りである。劇づくりは、上演すること、すなわち、より多くの観客に見てもらふことを前提とする。われわれの創作劇は、その意味でより多くの人に見てもらふことで、われわれの主張を理解してもらふ必要がある。コンクールに出場することは、その観点からも意義は大きい。校内の生徒たちだけでなく、地域の、県内の、そして他県の人々に見てもらえる可能性を持つのである。このように、われわれの創作劇が、仕手となって外に向かって表現活動することが、広い意味で平和教育の推進となることも指摘しておきたい。

昨年、創立記念日の行事として、全校生徒に第十作「灯の河に――邂逅のれくいえむ」を見てもらった。その時の感想を紹介してみたい。

この「灯の河に」という演劇は、原爆を扱ったすばらしい劇です。八月六日、作業をしていて被爆して死んだ四人の少女が、毎年、灯ろう流しの日に出会うという設定です。今年も四人は例年通り会いました。そして楽しい思い出話に花を咲かせている最中、彼女達をかばって死んだ先生、さらに悲しい別れ方をした親子が現われ、例年はないことに話は発展していくのです。この劇の中で、常識では考えられないことが起こります。火に追われて逃げる母親が、目の見えない我が子を見捨てたのです。たとえ、一時の気の迷いとしても、とても恐ろしいことだと思いました。「戦争は人々を

狂わせる」と少女達の先生は言いましたが、戦争のような恐ろしいことをした人々の心が狂っていたのだと思いました。

脚本、演出共にすばらしく、原爆、戦争について考えさせられた劇で、さすが舟入の演劇部だと思いました。(二年 池亀敦子)

あの狭い舞台に僅かの装置だけを使って、僅かの時間であれだけ深い内容の劇が制作できるものかと驚いた。登場人物の対話の中に、観客への訴えが脈打っているのが強烈に感じられる、そんな劇だった。

僕等がどんなに八月六日の痛々しい有様を、多くの資料などから知識吸収しても、本当の地獄図を見たわけではない。が、演技していた生徒も、観劇していた生徒も、それぞれ理解しようとする姿勢があった。これが、われわれ人間にとって一番大切なものだと痛感した。あの日、人々の運命をむりやり変形させた力は何であったのか。流れ行く灯ろうの揺れる灯が頭の中に鮮明に描かれる中で、いろいろ考えさせてくれる劇であった。(二年 舟尾彰)

受けとめ方の相違はあれ、そこには確実にわれわれの一石の波紋を感じるのである。演劇は一回性の芸術かもしれないが、それだけにもし感銘を与えることができるならば、その波紋の広がりも、振幅も、より大きなものとなり得るだろう。

中国地区代表の舟入高校が自作の原爆劇「明日に舞う」を熱演、会場の市公会堂に集まった約千人の観衆にヒロシマの意味を問いかけた。生徒の熱心な演技に、観衆は暑さも忘れて見入っていた。福

岡県から来た宗像高校二年の高橋玲子さんは「これまであまり原爆問題について考える機会がなかった。しかしこの劇で広島の人には真剣に考えていることがよくわかり、平和についてもっと考えなくてはならないことを痛感した。」と感動していた。

これは昭和五十年の広島市での全国大会を取材した中国新聞の記事である。他県の生徒の心に「ノーモア・ヒロシマ」の灯をともすことに成功したと言えよう。また、昭和五十三年の神戸市での全国大会では、上演後の幕間討論では感激を述べる発言が多く、われわれの創作脚本集を希望する方々が多数楽屋を訪れてくれたのである。

また、さらに大きい収穫は、われわれの創作劇が全国各地で読まれ、上演してくれることである。高校だけでなく、中学校や地方の劇団まで、毎年何件か上演の申しこみがある。それぞれの立場でヒロシマの問題を研究し、原爆や平和の問題をわれわれ以上に熱心に討議した上で取り上げてかれている。わざわざ広島まで取材に訪れた高校の演劇部や劇団の演出家もあった。

一方、自分たちで原爆劇を作り、わざわざわれわれの所に批評を求められたこともあった。

われわれの創作活動が、外に向かつては予想もしないひとつの力となって広がっていくことに驚かされるのである。昨五十四年には青年劇場創作戯曲賞で特別賞を受賞した。理由は、十年間にわたって原爆にかかわる素材の劇化、上演活動を讃えるとのことであった。個々の作品に与えられた創作脚本賞も名譽であるが、この賞は

われわれの日常生活へのひとつの評価として部員たちと喜びをわかに足るものであった。

最後に、われわれの作品を自分たちの問題として取り上げ、県大会初出場三位入賞を果たされた三重県立名張桔梗丘高校の部員の感想と、同じく自校の文化祭に取り上げて上演した兵庫県立姫路東高校の部員の報告を引用させていただき、しめくくりとしたい。

創部三年目にしてやっと念願の演劇コンクールに出場することができた。初出場であるので、実績を残すために堅実な劇をやるうと話し合っていた割には、今回の上演台本「灯の河に——邂逅のれくいえむ——」はむずかしすぎるかのように思えた。僕自身としても広島原爆にはそんなに関心をもっていなかったし、悲劇であるから初めはあまり気が進まなかった。しかし、この劇を進めているうちにこの台本の言おうとしていることが少しずつわかってきて、すばらしい劇であると思うようになった。時期も八月であったことから、戦争の話が知らず耳に入ってきたこともその理由の一つであろう。今まであまり気にとめなかった広島の悲惨さが、この劇をやっているというところで改めて実感として伝わってきたのである。この劇をやることによって一人一人の団結のすばらしさや、その他いろんなことを学び、僕個人においても部全体においても成長したと思うが、戦争の悲惨さを少しでも感じ、二度と戦争というものをくり返してはならないということを再認識できただけでも、僕にとってはずばらしい勉強になったと思っている。(三年 前川喜正)

文化祭も無事終わり、ようやく一息ついた次第です。ふり返ってみますと、反省すべき点や後悔も多く、決して心から満足はいく状態ではありませんでしたが、あの脚本にとり組んだことは、とても勉強になりました。

あの劇をして一番うれしかったことは、観客が大変真剣にみてくれたということ。例年文化祭とは、騒がしさがつきものなのですが、今年は、皆じっとくいい入るようみてくれて、演じる方も普段よりのってできたと思んでいます。

この脚本に取り組んだことにより、新しい分野の劇をすることができたと、部員一同、大変うれしく勉強になったと思っています。

(姫路東高演劇部一同)

。創作劇への取り組み——「虎杖忌」の場合——

「(舟入高校の創作は)初めから伊藤先生が主体であって、演劇部員の意見も参考にしながら作られたものだ。脚本創作は他の学校でもするのだが、舟入の場合は毎年原爆問題を追究した作品をつくられている点が大きな特色だ。(略)一作ごとに構成も巧みさを増し、趣向を凝らし、ユーモアも織り込む余裕綽々ぶりも生じてきたが、セリフ作りのうまさは作者の長所だと思ふ。

(略)その多様な場合を貫く一つの人物構成がある。それは原爆による被害者やその仲間である人々と、原爆問題に無関心無自覚な人びととの対立という構図が認められる。

もっとも、舟入の創作脚本は右の「対立の構図」によるものばかりでなく、原爆の被害者あるいはそれに関係ある人びとについての

資料を基にして、そういう人びとの心情や生涯を描写しようとした作品もある。(例えば「底流」とか「虎杖忌」)これらの作品は抒情的な性格を持つもので、(略)描写の底にある事実の重みとか、人物に対する作者の共感とか、仄かに慎ましく伝わってくるときは見る者を感動させ、(略)「広島には今もなおこのような原爆で受けた身心の傷を癒されたい人が存在するのか」とか「戦争というものは、何とむごたらしいことか」という感動をおこした。右のような感動を今の若い人びとが持つことは、一時代の人の生きざまとか戦争とかいう現象を考える契機ともなるだろう。(後略)「(舟入高校創作脚本集、前顧問鹿股秀蔵)

この中に本校の創作劇の目指す所はよくのべられているが、実際の劇作りの活動はどうであるのかを、第九作「虎杖忌」の取り組みで述べてみたい。この作品は前述したように、中国代表として三度目の全国大会(神戸市)に出場し、第二位を受賞したものである。この作品は、五十二年九月、野地先生に本校においていただいたお話を伺った時、「昔の家庭教師と生徒の間というものは、現代と違って、恋などというものが入る余地はありません。」と言われたが、野地先生の歌集「柿照葉」を使わせていただき、若き大学生と女生の心の交流の思い出を通して、消えることのない原爆の傷痕を、平和というものを考えていこうとした作品である。

現実の大学の研究室、歌によまれていて回想に出る女学生的美代子の家、先生と美代子の祖母との会話の場、原爆で美代子の焼死する場、そして現在と回想場面をつなぐ朗詠というように、場面転換の多い劇である。その朗詠用、又は劇中で使わされていた歌は、

一瞬にいのち奪はれ遠ゆきし

をとめごなればいよよ愛しも

。夕暮にひるのよろこび胸にもち

学ぶ空には星のきらめく

。師に歌のわけきくうちにわが胸を

一首の歌のはやただよひぬ

さまざまの秋の夜ふけのものがたり

愉しかりしを汝は逝きにける

さらさらとさらさらとある虎杖の

花かなしけれ汝を偲べば

まをよめのはしきいのちもほろびたり

家居も街もこととくなし

仏心となりしをとめの汝の面わ

きよらに偲ぶ虎杖の花

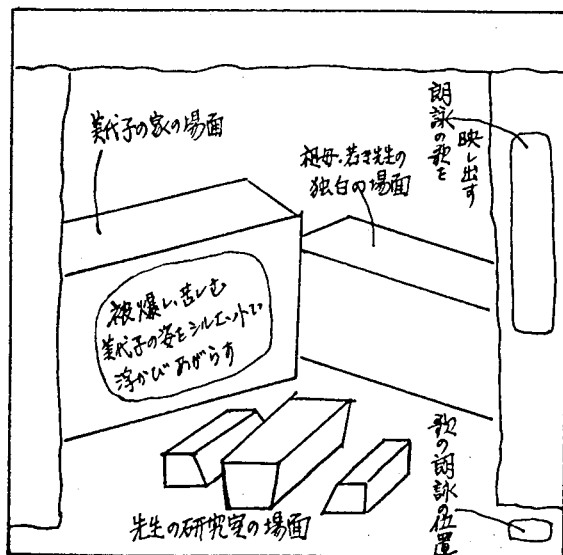
である。(。印は森岡千代子さんの作。)

△「虎杖忌」のあらすじ▽

大学の教授のもとに、高校の教師となった教え子が、生徒と共に吟詠部の発表会の出し物の助言を求めて訪れる。折から教授は処女歌集を出版する所で、その戦中から戦後にかけての一人の女生徒美代子との心の交流を詠んだ歌を通して昔を偲ぶ。家庭教師としての勉強の指導、そしてそれが味気ない下宿生活の中のおいであること、虎杖を裏山に取りに行っていた話、女生徒の淡い恋心、出陣に際して貰い、大切に持ち帰った虎杖が美代子の形見となったこと、美代子の原爆による悲惨な死、母の発狂等、さまざまな思い出が教授

の脳裏に浮かんでくる。そして三十三回忌を迎えるこの年、何年経っても消えることのない美代子を失った悲しみの中で、美代子の死を悼み、その供養に美代子への挽歌としてこの歌集を出すのだと話す。訪れていた生徒達は、その歌に強く心をうたれ、美代子が自分の学校の先輩であることも知り、発表会にその歌集を使い、先輩を偲びたいと願い出、許しを得る。

「虎杖忌」の舞台図



「虎杖忌」より

先生

(静かに語る。)私が美代子に会ったのはこの日が最後でね……。そしてあの、昭和二十年八月六日だ。あの一瞬の閃光が広島を襲ったうわさは、やがて私のいる隊にも伝わったが、終戦後しばらくして復員するまでどうする事もできなかったよ。やがてこの目で見た広島は全てが衝撃だったね。今まで想像もできなかったたった一発の破壊兵器は、この町を修羅の世界に変えてしまっていたよ。美代子も、母も、家も、あろうはずがなかった。近郊に美代子の祖母がいるのを思い出すまで、私は呆然たる思いで数日を過ごしてしまっただ。

歌が浮かび上り、上手で朗詠「まをとめのはしぎいのちもほろびたり家居も街もことごとくなし」

上手、祖母と青年が溶明。先生、溶暗。

祖母

美代子ですか、ありゃあ死にました。

青年

えっ！お二人共ですか……？

祖母

母親は助かりましたがのう。あの子は母親の目の前で……。朝の着替えをしようする所へ、ピカッときたらしゅうて、そのままあの子も母親も家の下敷きになってしまったんですよ。

激しい衝撃音と共に辺りは火の海。下手奥に炎に包まれて苦しむ美代子と美代子を助け出そうと狂うばかりの母親の姿が浮かび出る。

祖母

あの子は腹から下がつぶれてもろて、どがいにしても助け出せんかった。苦しみながら火に包まれてもろたんじゃそうです。

青年

そんな……。(絶句)……まるで地獄だ、残酷すぎるじゃあ

りませんか！

祖母

親がおつても助けられんのじゃから、神も仏もありゃあしません。一緒に死ぬ言うて泣き叫ぶ母親をみんな助け出しましたのう、ようようこまでたどりついたんですのう。……あれから母親は気が抜けたようになってしもろて、何を聞いても涙を流すだけですけえ、見よつてもこっちが辛うなります。

下手奥に、虎杖の花を手にほえむ美代子、泣きながら花を摘む母が浮かび出る。

母

美代ちゃん、今日もこないに摘んで来たんよ。ね、きれいでしよう……、本当に美代ちゃんみたいじゃねえ。

早う来てみんさい。美代ちゃん、早う……。先生にもあげるんでしょう。枯れんうちに持つて行ってあげんさい。美代ちゃん、美代ちゃん……。

美代子

先生、これ持つて行って下さい。じゃけど、枯れても捨てないで下さいね。そう、押し花にしたらいわ。本当に捨てちゃあだめですよ、必ず持つて帰って見せて下さいね！美代子のお願、先生、約束ですよ！

青年

きつと美代子が帰ってきたのだ。あの白い歯で明るく笑う美代子が、あの白い花の中にきつと立っているのだ。美代子、答えておくれ！私は帰って来たんだよ、こうして元気で……。ほら、ここにあの時の虎杖の花がある。大事に持っていたんだ。さあ、君に返そう。約束を果たすために、死なないで帰ってきたんだよ……、美代子……。

歌が浮かび上り、上手朗詠「仏心となりしをとめの汝の面わきよらに偲ぶ虎杖の花」

この作品を作り上げる中で苦勞したり工夫した点をのべてみると、次のようなものである。

まず、キャストの殆んどが三年生で進学を控え、更にこの年初めて共通一次試験もあることから、八月までクラブをさせることの勉強への影響であった。幸い生徒に誰一人として退部を口に出す者はいなかったが、後述の生徒の言葉にはあるように、それぞれが多かれ少なかれ不安はあったようだ。私たちとしては、文書で練習日程を家庭に連絡したり、生徒の学習の指導を細かく行うなど、また、大会前の夏休みの練習を、極力、期間も時間を短くする等の配慮しかなかった。前年度決定した代表校が次の年の夏に出場する現在の演劇の大会のシステムでは致し方ないのだろうか。

また、前年の九月から翌年八月まで同じ劇を一年間続ける為に、どうしてもマンネリに陥ってしまう。それを防ぐため、県大会が終わった後の二週間と、中国大会が終わって文化祭までと、文化祭が終わって夏休みまでは、完全休養とでもいう形を取り、その間「虎杖忌」の事はできるだけ忘れさせ、新鮮な気持ちで次の練習に入らせるよう図ると共に、作者は作者で、前回の反省を基に、若干の脚本変更を重ねていった。

更に遠くへの遠征のため、装置等を運搬していればその額が大変な所から、現地調達で費用を軽減した。例えば、上手下手の美代子の家となる台は、舞台関係の会社においてテレビ用イントレを現地で調達したり、机や椅子は組み立て式にしてこちらで準備し、現地について直ちに組み立てる等の工夫であった。こうして輸送するならトラック代だけで三、四十万円はかかるであろう所が、材料

費、借賃全てで十万円足らずで済んだのは大助かりであった。良くも悪くも遠征慣れから出た知恵である。

この年度は、会場の都合で中国大会が翌年の二月にあるという苦しい日程であったため、次のような練習日程となった。(上段の数字は月日)

- 9・12 初稿完成
 - 14 キャスティング決定。台本研究。読み合わせ。
 - 24 立ち上げを開始。
 - 下旬 朗詠二名、外部へ練習に通い始める。
 - 10・1 講堂を利用しての練習開始(二日に一日程度。)
 - 10・7~10・25 修学旅行、期末考査のため練習中断。第二稿。
 - 10・26 練習再開。
 - 11・3 総げいこ。
 - 5 地区大会リハーサル。
 - 6 地区大会上演。
 - 12~13 県大会(三次市へ一泊二日。)
 - 26~ セリフの研究。
 - 12・16 第三稿完成。練習開始(冬休みまで。)
 - 1・8~ 練習。
 - 2・4~5 中国大会。
 - 6月中旬 文化祭
 - 8月初旬 全国大会
- この間の様子を演出の生徒のメモ及びクラブノートを引用しながらたどってみよう。(「」内が生徒のメモ。()内は顧問の感

想。)

7・29「今新聞被爆者の体験や33年間の生活を描いた連載をしている。」(この頃から毎年創作考えるのか関心を示し始める。)

9・19「今日からテンポ、感情づくり。舞台図をはっきりと。」(読み合わせと併せての脚本研究。生徒の関心は劇作りであり、脚本に対する鋭い指摘の少ないのが残念。)

9・22「一日一回しか通せない。これでいいのだろうか。」(練習日数を考えて焦る。)

9・26「キャスト……がんばってね、体を大切に。スタッフよ、キャストと一緒に走ろう。明日からスタッフも何かしら見つけて毎日クラブをしよう。暇な時は劇を見よう。」(クラブは全員が参加すべきです。やることであろうとなかろうと。)(劇作りの初めはどうしてもスタッフの仕事が明確にならないし見つからない。手持ち無沙汰な一年生を見ての二年生の励ましの言葉である。)

「もり上りに弱い。何かやまばが欲しい。」(劇として一つのまとまりを目指そうという意欲が伺える。)

9・30「なんかこれが自分の劇という感じがしない。でも『美代子』はKがやってほんまによかったと思う。」(キャストインゲの成功の喜びか。)

10・(個々の生徒の演技、セリフに対する注意が多くなり、場面毎の舞台図もある。)

10・4「過去と現代のつながり。」「演出の立場——先生に頼らない。もうこの劇は私のものだ。みんなの前でよくよしない。」

(大局的に劇を見ようという姿勢と、自分たちで劇を作るんだという気持ちがある。)

10・19「K、元氣ないね。」「G君、のどが痛いとのたまひける。」

「Tの広島弁おかしいね。」「声が小さい。」「セリフに目的がない。」「リアル・リアリズム、らしさ。」「小道具。」(厳しい指摘が多く、又、部員の健康状態にも気を配っている。)

11・1「上(過去)と下(現代)の雰囲気演技も照明も差を。」

「ナレーション、大きい。」「暗転の時の移動はライトが完全に消えてから。」「効果は暗転では十分に効かず。」「最後、光を落とすのが早すぎる。」「茶を入れるタイミング。」「先生、感情に起伏を、冷たい。」「セリフのない時の演技。」「目線が低い。首を振りすぎる。」「針山、針箱は誰が片付ける?」(演技に対する注文も細かくなると共に、照明、効果と劇全体のバランスに注意し始めている。劇の仕上がりに気を配っているのは大会を二日後に控えている為か。)

11・2「テンポがのろい。ていねいすぎる。前半もっと快調に。初めからしんみりしすぎる。」「花を渡す時もっと時間をかけて感情の高まりを。」

地区大会後「青年、心のかげり。教授の動きに反応を。女教師、君は先生なのだ。祖母、もっと間を。母、表情を。美代子、女生徒らしいはつらつさ。」(県大会に向けての個々の注文を出している。)

県大会 予定

床 食 声 会 食 衣 ク 演
6 : 00 起 : 朝 : 発 : 開 : 通 : 昼 : 更 : 夜
7 : 00 8 : 00 9 : 00 10 : 00 11 : 00 11 : 30 15
11 : 00 11 : 30 15
13 : 15 上

「ここまできたら Success ノみとれよ。(フアイトのあふれる学年であった。)

「(講評)スマートにまとまっている。構成舞台はおもしろい。終りをカットしてもよい。」(大切な所はよくメモしている)「ヒロシマの心を知ってもう。33回忘なんてない。教え子を失った悲しみ。死んだ人の怨みは消えない。鎮魂歌↓和歌虎杖 美代子。みんなで一つのものを作ってゆく。高校生らしいもの。」(上演後、観客との幕間討論に備えて自分の目指したものの整理であらう。)

中国大会後「みなさま、本当におめでとう。今の実感としては『本当に優勝したんですね。』——カープ古葉監督50年優勝時——といった感じ。神戸を目指して一年、苦労が実って、もう……。それにしてもよくやった。」(入部した時から全国大会出場を目指し、突走る感もあったが、それだけに喜びは大きかったであらう。)

4・21「ホッシー——あーあ、文化祭も全国大会もやりとらない。メンドクサイ。誰かかわってくれ。タテマエ——私は『虎杖忌』の演出だ。最優秀はモラッタ。みんながんばろうぜ。」「まちがっても全国大会へなんか行くもんじゃありませんよ。」(進学を考えるとその苦しい心中を察することができる。)

5・31「体育系クラブの三年生は引退か、ええねえ。私たちは8月

まで……」「『虎杖忌』のみなさん、マンネリ防いでる？一生懸命やるうね。」(苦しみながらも励まし合い、夏休みともなると大変なフアイトで大会に臨んでくれた。)

この「虎杖忌」を上演した生徒達の思い出に「やり始めた当初は、劇のうえで話しか受けとめていかなかった私も、全国大会へ行く前に市女(舟入高校の前身)の同窓生の方が、私達が総げいこをしている所にいらっしやってとても感激して下さり、同窓生の方々の中に、劇中の母と同じような境遇の方(娘を原爆で亡くした)がいらっしやるという話を聞いて何とも言えない感動を覚えました。」(母親役の三年女子)とか、「三年の夏、神戸文化ホールの緞帳がゆっくり降りていくのと同じ速さで、身体全体に満足感がひろがってゆくのを感じた。お客さんの拍手は、好意的で暖かく、そして自分達の感動をそのまま表現している気がした。楽屋に戻ると他県の代表校の生徒達が様々な感想を述べにきてくれた。審査の先生方からいただいた賛辞よりも数倍嬉しかったのは、この同じ高校生の共鳴をうけたことだった。

原爆が投下されて三十余年。私達の世代にはこの悲劇が風化されようとしている。戦争を知らずにそだった私達は、平和を次第にあたりまえのものだと思いはじめている。そうではなく、平和は一人一人の努力によって保たれるのだということを私はアピールしたいと思っていた。楽屋にきてくれた人達、この脚本を欲しいと頼みにきてくれた人達、大会後日、感想を手紙で伝えてくれた人達。私の気持ちが高世代のみんなに伝わったのを感じたとき、あらたな満足感がひろがっていった。」(演出の三年女子)とかがあるが、この演

出を担当した生徒は、自分たちの上演が終わった、閉会式を翌日に控えた夜の反省会で、「『賞はどうでもいい。私たちの劇を見て貰うんだ』と言っていました。やはり心のどこかには最優秀になれたらと思ってました。でも今は、本当にもう賞なんかどうでもいい。みんなで最高の力を出した舞台を作れた、本当にそれだけでいいです。みんなよくやったよ。もう何もいりません。今まで文句ばかり言ってきましたが、本当にありがとうございました。」とあいさつをしていたが、コンクール意識からの脱皮、そして自分たちがやるうとしていたものを確かに把んでくれてもいて、顧問としてはこれ以上何も言うことのない本当に嬉しいあいさつであった。

冬のランニングによる体力作りを始めとして苦しい練習にも自分から積極的に取り組み、通しげいこの後の演技の意見交換では、互いが互いの演技を指導し合い、スタッフも、照明と効果のチーフに責任感旺盛な生徒がおり、その練習は、大会間近ともなれば糸を張りつめたような緊張感を漂わす、チームワークのよい学年であったが、その生徒たちが、「虎杖忌」という劇を作り上げていく中で、人間的にこのように成長してくれたことがこの上ない喜びであった。何のために原爆劇をやるのかを理解し、さらにその理解に到達する人間的成長の過程をみせてくれたことが、こうしたクラブ指導のやりがいと味わわせてくれた。

。おわりに

廃部寸前から再建して十八年、創作劇活動を始めて十一年、常に模索しながらもわが演劇部は歩み続けている。課外活動とはいえず、

生徒も顧問の教師も全力投球の連続である。学習活動にはない何かを見つけて出そうと、部員たちは一心に努力している。遅々たる歩みではあったが、これまでの足跡は良きにつけ、悪きにつけ、伝統という形の重みになってこれからも部員たちにのしかかるかもしれない。たしかに現在の部の状態は、安定期にあると言えよう。文化系クラブでは有数の大所帯になり、かつてのような廃部問題は、当分起こる気づかいはあるまい。それだけに、せいかくの個性を集団の中に埋没させてしまつて、ただ演劇部に在籍していただけだったという思いにさせてはならない。演劇部は個性を大切にす集団でありたい。同時に、創作劇活動を標榜する以上は、日々の活動は創造的でなければなるまい。いずれにしても、十名にも満たない部員たちと苦楽を共にした手づくりの活動を、大集団の中にどのような生かしていくか、これからの大きな課題であると言えよう。

創作劇は、部員たちの姿勢が変わらない限り、これからも受け継がれていくだろう。確かに作劇の方法も、一作ごとに反省と工夫を重ね、内容的にも表現的にも向上してきたように思う。われわれのように、特定のテーマで毎年創作することは大変ではないかと、しばしば質問をされる。よく話の種があるものだ、という意味かも知れない。しかし、考えようによっては、わき見をしないですむから素材の発掘が比較的容易だとも言えよう。ただ、高校演劇というレベルにおいて、どう受けとめるか、重くて大きな素材だけに、いかにして素材そのものに寄りかからないで表現することができるか、難しい課題が常に立ちふさがるのである。

確かに、素材離れは難しい、素材とテーマを、混同しがちであ

る。

茨木憲氏（演劇評論家）は、われわれの作品に対し、「もっと素材へのもたれかかりを排し、感傷や詠嘆とは別に、人間の深奥部に突きささる表現性を期待したい。」と叱責いただいた。清水邦夫氏（劇作家）は、「原爆の特異性というものを、もっと鋭くとらえたところから、逆にそれが普通性をもって皆に問いかけてくるということが、ひとつのモチーフのつかみ方ではないか。」と評された。その他、多くの方々から発表のたびにご助言をいただく機会に恵まれている。そのひとつひとつに謙虚に耳を傾け、原爆イコールヒロシマの安易な図式ではなく、人間存在の問題として原爆をどう密着させていくか考えていきたい。

高校演劇という小さな枠組みの中の、ささやかな実践にすぎないわれわれの報告ではあるが、日々の国語教育のどこかに接点があるものと信じ、まとめてみたわけである。

（広島市立舟入高等学校教諭）